



「景子ちゃん、いっぱい、いっぱい頑張ったのに」。3歳だった1992年夏に腹部にがんの一種、神経芽腫が見つかり、つらい抗がん剤治療から手術で完全寛解し、2年の治療を終えるための最後の検査で脳転移が見つかり、妻は涙を流した。

その後、脳の手術、放射線、抗がん剤治療を繰り返した。94年の暮れには骨髄への転移が見つかった。「大変残念ですが、あと数カ月です」。医師から告げられ、言葉が出なかった。

年明けの2月。景子の6歳の誕生日に妻の提案で子ども用のウエディングドレスをプレゼントした。お嫁さんが好きだった景子は「うわー、やったー」と大喜びだった。数週間後にはカツラも届き、妻は景子に化粧をした。鏡を見た景子は「お父さん、写真撮って」とうれしそうに言った。涙でビントがなかなか合わなかった。

転移が見つかる前、治療が順

調だったため保育園に通った。月の半分しか通えない景子を友達、先生、お母さんが受け入れてくれた。骨髄転移後だった卒園前の発表会で景子は劇のリーダーを一生懸命務めた。

4月には小学校に入学した。景子は歩けなくなっても自分で車椅子を使って通学した。6月には転移が広がり、医師は「あと2〜3週間です」と私と妻に告げた。それでも景子は気分がよくなると「宿題するから起して。次に学校に行くときに困るでしょ」という。練習帳に一面を書くごとに「ハー、ハー」と息をついて宿題を終えた。

私は「景子は死んでしまう。なんで頑張るのだろう」と思った。間違っていた。景子は生きて抜いている子だった。今できることを一生懸命するといのちは輝く。その輝きは死んでも決して消えない。そう教わった。

脳圧が上がリ、医師に鎮静剤で眠らせることをお願いした。意識も感覚もないはずの景子に看護師は声をかけながら温かいタオルで体を拭いた。私は「どうみとるか」を考えていた。看護師は「どう寄り添うか」を思っていた。尊厳ある死は尊厳ある生の向こうにあった。7月5日夜、景子は天国に旅立った。